

お客様各位

株式会社 山喜農園
新潟県魚沼市原1280-1
TEL. 025-794-2455
FAX. 794-4168

E-mail: info@yamaki-noen.co.jp
HP Address: http://www.yamaki-noen.co.jp

球根情勢報告 (4月20日加筆・修正)

刊出張報告 (H27年4月6日~4月12日)

***この原稿は、4月13日に書き上げました。4月14日PM22:00以降新しいニュースが入ってきました。**

***この原稿は、4月20日に緑字で加筆・修正されました。ご確認ください。**

平素よりお引き立ていただき誠にありがとうございます。

刊に出張してまいりました。ご報告いたします。

3年ぶりに刊に入りました。今回が確か8回目の訪問です。(9回目だったかな? 忘れた…。)
4月のタイミング(生育ステージ)で、球根栽培地を訪問する事はこれが初めてです。

過去のチリ・ニュージーランド・オランダ・フランスの圃場確認は、
北半球では、5月・6月・9月・11月・12月
南半球では、1月(※7月)・3月(※9月)・6月(※12月)(※北半球でのイメージ)
しか経験が無い為、今まで全く経験のない生育ステージでの見極めとなります。

4月(※10月)は、まさしく球根栽培圃場において、球根内での翌年の芽形成が肉眼ではっきり確認でき始める時期となります。これは他のどの月でも確認することが出来ません。

新潟県産/北海道産では、その時期の芽形成調査を早掘は言うに及ばず遅掘球根についても実行していますから、大体のイメージはあるのですが、外国の球根では…。

初めての体験でしたが、各産地間において自然状態(各々の栽培気象環境)での芽形成があまりに大きく違っていたことは、「ビックリする」くらいのレベルでした。

今回は2000年代の初頭、刊産が隔離検疫免除となる前に、JFTA(日本花卉球根輸出入協会)として視察して以来、2回目のJFTA研修旅行でもありました。

私を含めて4名(4輸入業社)2~3名(2輸出業社)での視察でした。

後日現地での作業風景写真を送っていただくことになっております。(大勢だと業務分担出来て良いなあ。)

お互いライバル会社でも、「目的を一緒にすればむしろ目標達成には近づける!」という姿勢をなんとか刊球根生産団体である「APEB=アペップ」の方々にもメッセージをして伝えたいという思いで、この研修旅行スタイルをとったのですが…(N.Z球根生産団体「BENZ=ベンス」とのJFTA合同会議も同じ目的…)

相変わらず生産社間の横の連携は、オランダ/ニュージーランドに比べるとちょっと…。

フランスの生産団体がうまくまとまる様に、一所懸命「思い」を伝えていきたいと改めて感じました。

***4月14日PM22:00に、オランダ輸出業社が良いニュースを伝えてきました。兆しが出てきた?**

韓国は、輸入港にて球根品質検査をP・C・Rで行うそうです。(今年から突然…) LSVに至るまで、許容範囲という概念では無く、「0%」要求だそうです。韓国が主力として使っている品種でそれを要求する事は、まず、オランダその他の国からの輸入球数が、半分以下にまで減少するのではないかと?

輸出業社は、ややパニックに近い反応を示しています。(韓国百合切花生産はどうなるの?)

世界中で景気が良くないせいなのか、貿易も保守的な動きになってきている様子。

日本向けの輸出だけの問題では無いのです。

刊においては、球根が生産されている3地域それぞれの植物防疫所毎に検査方法と検査速度が違う。一週間に50~55本の海上コンテナを検査処理できる会社もあれば、20~25本しか検査数量がこなせない会社もある。(各地域における植防検査速度の差…)書類発行速度が、一週間内外で整えられる地域に対して、10日以上かかってしまう地域もある。

***4月14日 PM22:00にオランダ輸出業社からの連絡が入り、一地域に対して刊植防からの連絡で、検査手順見直しの為の提案がなされたそうです。今週中に会議がもたれるとの事。何が影響したのでしょうか?良い事だと思います。**

刊産の球根がまだ免除になっていない国に対しての政府間交渉に際し、球根生産団体からの意見・要望を伝えていく仕組みが出来ていない。(せっかく新しく出なおした会社があるのに、理事メンバーに加わっていない。従って、3地域中2地域からしか理事が選出されていない…)

もうちょっと『産業ベースで一緒に考える』という事に、本気で取り組んでほしいなあというのが正直な感想でした。(これって初めて刊に入ってから、相変わらず変わっていない部分…)

私が書くレポートは、誰かが訳して刊やオランダ人にも伝わっている様ですので、「頼むから初タイプキャンペーンだ」と言わないでほしいです。本気でそれが刊の球根農家の為だと思っていますから…。

***4月14日のオランダ輸出業社からの情報は、良い知らせだと思います。**

訪問した球根農家 (球根生産会社)

* 北部地域 : ロアンゾ エル

ザンバルズ社

圃場品質は、3年前に比べてずいぶん改善していました。(3年前も悪くはなかったのです。)

開花球ベースで、**約50ha規模で設定されている。**

元々ワル地区で生産していた会社が、2000年代の前半にこの地域に移動した。

マール社の球根栽培も受託している。

将来的には30%生産受託、70%自社ライセンス保有している品種で球根生産をしていきたい考え。

最も暖かい地域。

球根内において、ハリアの芽が既に3cm位に成長していた。

日較差が大きかったのか?夏秋の温度差が大きかったのか?養成球の掘り取り時期、養成球の温度処理が違ったのか?ハリアだけではなく、別の品種の芽もすごく進んでいた。

球根生産圃場において、「既にオランダ産の12月くらいの芽の大きさになっている事が」、休眠打破の為の低温積算がされていると思っはいけない。

これで確認できる事は、やはり新潟やフランスの様に暖かい気象条件なのだという事です。(休眠打破は遅い。)

***休眠が破れていないのに、球根の外に芽が出てしまうタイプの品種を、この地で作るべきではない。**

この産地/この会社の球根は、掘り取り後の管理体制等に気を使っていけば、遅い作型等で良い仕事をしてくれると思います。

この地域では、ザンバルズ社も球根生産を再開しています。(前にこの地域で作っていた…。)

2年栽培の1年目のみという事で、今回は確認してきませんでした。

* 南部地域 : オルノ/ピユエその他 (ザンアント・ブリーズ社・ザンバルズ社・刊・ボレン社)

ザンアント・ブリーズ社

25~50ha規模を設定。

その生産面積の大半が、ワグダ切花農家向け。
品質は…あまり使っていないので、分からない。
今回訪問した中では最も寒い所。

掘り取り/温度処理は？

経営面積と比較すれば、素晴らしく立派な施設を保有している。ワグダ人の生産アドバイザーが入ったので、今後良くなっていくと思う。

日本市場に対しては「検査代が高い…」あまり積極的なコメントが聞けなかった。

サント・ブリーズ社においては、当社取扱い実績がほとんどない品種のみだったので、芽形成調査を行っても、判断がつかないだろうと考え、調査しなかった。買っていない球根を掘ってくれとは頼みづらいですしね…。

*この会社は、50代前半から60歳前の3名のオーナーによって経営されているとの事。

今回合わなかったうちの一人の方が行政対応等に確かなセンスを持っているとの事。

彼に今後のAPEB内での取り組みに対して期待したいところです。

若干の取扱いをVial社産（ほぼ兄弟会社みたいな感覚で見えています。）共々計画しています。

刊・ボリ社

南部地域の中では北側の方。経営規模設定は、25haくらい？

同じ植防間内の様だが、サント・ブリーズ社の圃場はまだ真っ青でみずみずしい葉色に対し、こちらは新潟の酷暑期を過ぎて秋を迎えた時の顔つき…。

今後のニューランド/刊におけるルボンス・シリアの栽培面積減少を予測してあえて2つの品種に生産を絞って増殖しているとの事。（その他、新旧品種有りますが…、イマイチな構成となっている。）

ワグダから持ち込んだ母球は、12年産/13年産ですから、10年産/11年産のそれに比べれば、遥かにマシになっているでしょう。（実際そう見えました。）

15年産は、免除トットは無いようですが、16年産からは、日本向けトットを取得するとの事。

施設は立派。サント・ブリーズ社と同じワグダ人の生産アドバイザーが入っているのも、一定以上の品質にもってこれるのでは、と思う。

ルボンス・シリアの芽を確認したが、まだ茎は立っていない。

芽の様なものが、1~1.5cm位確認できている程度だった。シリアは、やや進んでいるように見えた。

サント・ブリーズ社と比べて葉色は進んでいても、芽形成ステージは、やはり早くない。

16年以降、導入検討したいです。

サント・ブリーズ社

刊、又は世界でも最大規模の百合球根生産会社。

既に北部地域でも紹介した様に、現在6カ所にて生産。本年から原母球/母球専門の生産場所も隔離設置するとの事。

掘り取り面積では無くて、地上部に植物自体が確認できる面積は、約180ha。

開花球1年栽培：2年栽培の比率は、7：3くらい（目標）

南部地域にあるサント・ブリーズ社近くの圃場、ピュウエ地区、オロ地区、3カ所の畑を確認。

他の2ヶ所は車で通過した…。

養成球圃場は、3年前もそうだったが本当に素晴らしい。（ウイルスについては別問題。）

開花球圃場は、1年栽培/2年栽培共に秋らしい顔つきとなっていた。

確認した圃場での植物体では、ルボンス・シリア・ハセブラ・サブリカ・プレミアムトットとも葉の表裏ともにPlamv症状を見ることはなかった。

やはり芽が小さい。（南部地域内において、かなり広域に栽培地が分散しているのだが…。）

1年栽培でも2年栽培でも芽の大きさはさほど変わらず、刊・ボリ社同様1~1.5cmくらい。

茎の部分は全く立ち上がっていない。

ロアンジエス地区の芽形成とはまるで違う。

但し、これをもって「遅れている」、「休眠打破が遅くなる」わけではない。むしろこれから早くなるはず…。（平年比較という意味ではない。）

秋の同じタイミングで新潟産と北海道産の芽の大きさを比べれば、新潟産の方がはるかに大きい。

（新潟の方が休眠打破遅い。）

秋の同じタイミングでワグダ産とフランス産の芽の大きさを比べれば、フランス産の方がはるかに大きい。

（フランスの方が休眠打破遅い。）

バルデビアリー社産を除く他の球根生産会社の球根は、平均的に外リッソ数が多かった。(3~5枚くらい)一方、内リッソ数についても、オランダ産との比較でやや多いように感じた。(2~4枚くらい)これは輸付きにかなりの影響を与えることになる様に感じた。(ポテンシャル高い?)土質の差だろうか?

*今年から来年にかけて、5~6カ所の球根生産は、オランダで言う所の委託栽培型の球根生産になる。(球根栽培のみ)

*内、3カ所または4カ所において、ホーナー農家型の業務を分担して行う。(選別・計数も行うという意)

*最終的に、球根生産が全く行われていない北部(ロシアゾニスよりさらに北...)果樹生産地帯にて、輸出業務を行う形。(この地域の農産物輸出/輸入は、果樹輸出の関係で圧倒的に進んでいる。)

これが3年前と大きく違う所。

オランダの大規模農家には無い発想。すごいなあ~と思いました。

14年産においては、10年産/11年産オランダ産母球を使っていたとの事。15年産の1年栽培については、12年産NL母球が多い?

10年/11年当時にソ社からの種球導入等の関係(主にLA...)で、品質管理でかなり苦戦している様子。10年/11年は、まだそういうレベルだったという事です。

仕組みは、オランダ人にも想像が付かなかった生産体制を作ってくる(自分にも想像できなかった...)くらいだからやはり凄いとは思った。

数年前のソ社同様、『血を流す覚悟』で廃棄を進めて頂くしかない。

そうすれば、良くなってくれると思います。

*全ての球根生産会社に言えることだが、ウイルス病に感染拡大しやすい品種と比較的感染が広がりにくい品種が確実にあると思います。(セダとリアルムの例でも分かる様に、徐々に確認できつつあります。)

これは感染していても発症しやすい/しにくいとは違う次元の話。

今現在生産している品種、今後生産しようと考えている品種、この点について誰かがアドバイスをする事をちゃんとアドバイスとして聞いてもらえるかどうか?(刊の農家全て...)

日本でもそうですが、被害妄想的に悪口と受け取られたのでは会話が成立しない。

そういう意味では今回の訪問で、変な誤解は解けたと信じたい。

夕食にごちそうになった「サーロインステーキ」は、素晴らしいものでした。(それにしても物価は...食べ物はいいみたい。)

カド社の藤井さんから分けて頂いたTボーンステーキも本当にうまかった。

赤ワインは言うまでもない。

ブッシュマン氏の隠れ家的な店に連れて行ってもらいました。

良いミーティングが出来たと思っています。(呑みニケーションは、絶対必要!)

やはり複数の輸出業社から聞いた話ばかりじゃだめですね...

ちゃんと農家の声が聞こえてこない!

案内してくれたブッシュマン氏は、前身のパンフィックラー社の時代から20年以上ここで仕事をしている人です。

カハバ社社のファンロン氏、サザンバルブス社のブッシュマン氏、バルデビアリー社のアレックス氏、この方々が業界のキーマンになるのだろーと思います。(今回訪問した日本人は、私を除いて41~44歳。刊人は3名とも43歳でした。)

政策面で協調体制を作っていくのには、他の純粋刊資本の会社にも期待したいところです。

この産地/この会社の球根は、N.Z産で言えばカド産並みにポテンシャルが高い。

幅広い作型で使えるはず。複雑な取引関係が解消されて「何が来るのかしつかり分かれば」使い易くなると考えています。15年産は輸出/輸入両社本当の意味で力を合わせて取り組まなくてはと考えています。

中央地域？バルビア

刊は、13の州に分かれている。球根生産は、3つの州？

便宜上、北部/南部/中央部に分けさせてもらった。気象条件の差もさることながら、行政管轄が違っている様だから。この事の重要度がまさかこんなに大きかったとは、今回訪問するまで気が付かなかった。

バルビアアリ社

この会社に対しての思いは…、この思いが大事だと思っている。

販売面積は、44haしかないが、地上部に植物が出ている面積は、約100ha。順調に行けば、来年再来年以降生産は増える。

前身のソ社の時代から20年以上勤めているアレックス氏から案内を受けた。

訪問前日からP0社2名だけでなく、ZP社からも追加で1名参加となり、刊の魚料理をごちそうになった。

刊の白ワインもおいしいんだなあ。

数年前に訪問した際に連れて行ってくれた店。懐かしかった。

まだ完全にキレイになったわけではないが、一番最初に汚れたから、本当に血を流したから、もっと言えば、経営が変わったから、出来たことなのかもしれない。すごく良くなっていると思った。

生産のカギは、コトフ氏（オランダ人）、行政対応のカギはアレックス氏。（刊人だから。）

どちらの分野も関わる育種会社/輸出会社の性格からあまり得意分野ではないと思うので…。（両社との付き合いは長い…石頭なんだ…。）

2人には頑張ってもらいたいと思う。

ZP社独占品種・ブレッタ育成品種（母球生産含む）さらにもう1件のオーナー農家から受託生産（鉢物農家）・自社ライセンス品種、4つの構成となっている。

今の所、3軒の輸出業社が世界市場に向けて球根を販売する様だ。

北部では2社（今は、サハベス社だけだが、来年からザンバルブス社も）

南部では3~4社（今回訪問しなかったヴァル社含む）

中央部では1社

となっておりますから、横の関係構築が本当に大事になってくるはず。

足の引っ張り合いや出し抜き合戦はやめて、全体が良くなる方向を向いてほしいものだ。

T1・T2の球根生産割合が圧倒的に高い。

新品種については、ウイルスの罹病率は低く、良くなるだろうなあと思う。

但し、一般的にT1・T2球根に対しての温度処理は、通常サイクルの生産球よりも難しく、休眠が破れるのも遅くなるもの。

（例①：原母球を早く掘り取るのと同じく、営利球を掘ってしまったら…。）

（例②：小さいサイズを早く納品しなければならないから、品種によって充実の遅い品種を早く掘ったり…。）

*前年7月15日/20日掘りだった品種を、6月25日~7月5日掘りに変更したら何が起きるのか？注意して見ていかなければ…。

営業都合が生産都合に優ってしまうとせつかくの良い球根が…

そういった点を踏まえても、防疫体制まで含めた物流環境を整えてほしいものと思った。

6週間の輸送期間を克服するためには絶対避けて通れない。

***良い知らせ、兆しが出てきた？4月14日PM22:00情報。**

球根内芽形成については、不思議な結果が出ています。

シベリアについては、1年栽培/2年栽培共にサハベス社に追随する大きさとなっている。（茎がしっかり立って約2.5cm）リボソについては、1年栽培/2年栽培共にピュエワ/オトル地区ザンバルブス社・リボソ社並みの小ささとなっていた。（茎が立たず1~1.5cm）

今までこんな球根見た事ないと思ったのは、1年栽培/2年栽培両方ともにソボソのソボソの外ソボソが、8~10枚しかないのに、内ソボソ数は30~35枚もあった。(この内ソボソ数は、今まで見た事が無い。これがバルデビア産の独特な木姿を作っている要因?)

球根栽培が良く良く上手なのだろうと思うが、普通、外ソボソ数が10枚前後なら内ソボソ数は20枚程度。(ソボソ養成球サイズ 8~12cm、掘り取りサイズ 18~20cmの場合)。

*新潟産、NIS社産など暖かい地域で生産されたソボソは、その年の気象条件により帯化現象・茎枝別れ現象が起きやすい。もしかしてバルデビア産ソボソにも、その影響があるのか?

母球はソボソからの導入との事だが、もしかしたら T1、T2 からソボソを向いた比較的新しい球根なのか? (草姿を見るとそんなに新しく見えなかったけれど...) そうだとしたら芽形成がソボソよりも遅れているのは、納得できるんですけどね...。この考察は、間違っている可能性がむしろ高い。T1・T2 に近ければ、普通はソボソ数枚数が減るはずだから...

T1・T2、ソボソ片生産圃場と開花球生産圃場で、大きく2つに分けられるが、圃場の葉色はまるで違った。

真夏の色と晩秋の色くらい差がある。この差も凄まじいものがあると感じた。(植付時期、その他の影響)

開花球・生産圃場の畑の色合いは、今回訪問したどの農家の畑と比べても最もソボソが進んでいたように見えた。

(1年栽培/2年栽培共に。地力が少ないのかなあ? 悪い意味ではありません。念の為。)

この産地の球根は...、休眠打破が早いのか? 遅いのか? 今回の調査では解りかねる。今までの経験では、早くはない。今回の芽形成から分析しても、やはり早くないのでは...。(今年は枯れ込みが早い...、早く使えるのか?)

ソボソ的には、一部品種を除いて良くなっているはず。使用時期設定等考えながら、使い方を改めて研究していきたい。

*今回は、2~3年前の N.Z/C.H 研修旅行とは違い、同行した輸入業社の皆様が経験を積んでおられる方ばかりなので、めったな分析もできません。

かなり慎重に文章にしなければならぬ...まして JFTA 研修旅行ですからね!

重要※

各生産地に、6~7月にかけて『0.H/0.T系掘り取り後の球根温度管理』について聞き取りを行いました。気象データ等が不足していて、何かを分析できるほどには至っておらず、今回は「良いか悪いかの判断」をいたしません。(掘り取り時の天候が分からなければ、いつの時期、何度が適しているのか判りませんからね。)

但し、『注意をするポイント』であることは間違いありません。使う側がそこを意識して、何年も時間をかけて見極めていく事だと思います。

ところで、作況傾向について一切触れていませんが、訪問した全生産会社共に大きなエラ等はなく、作況は良くなるのではないかと思います。

ほとんどの会社が肥大期間を約3週間近く残して、後、0.5サイズくらい太れば十分な大きさになっている様に見えました。

一部遅露の害が出ている農家もありましたが、大きな影響にはならないように思います。

N.Z産以上に0.T系の生産量が増えています。果たして、0.H系の生産を維持し続けてくれるのでしょうか?

Plamv問題以降、品種更新が進むとどちらかと言えば、0.Hをやめて0.Tに変更されてしまう事が気になります。

N.Z産も作は良さそうです。(4月14日に今年始めて地温が10℃を切りました。もう球根は太りません。充実と低温積算のソボソに入っています。ソボソ地方。)

球根流通に大きな変動要因があるとしたら、Plamv問題解決のための圃場廃棄が進むこと。現在 P.C.R にて検査が進められている最中ですが、複数の球根農家/圃場で最低8~15ha 近くの(開花球のみで) 廃棄が実

行されるであろうとの事。(N.ZとC.H両方)

もしかしたら、発注してある球根も検査結果次第でキャンセルという事が起きるかもしれません。痛みは伴いますが、そうするべきだと考えています。手配した球根は良くあってほしい。

でも、どの品種が対象になるのでしょうか？どのロットが？

その他の球根取引情勢

- 1) 今回は年頭に立てていた出張研修計画ではなかった為、出張前後とも大変忙しい日程となってしまいました。
- 2) 本当は、14年産オランダ産流通状況/品質傾向もお繋ぎしたい時期なのですが、改めて後日。
- 3) 14年産南半球産品質調査/クレーム対応をまだ終了しているとは思っておりません。問題があればお繋ぎ下さい。
- 4) 15年産オランダ産/フランス産百合球根仕入作業が始まっています。
オランダ産 A.H/L.A については、約85%の仕入が終了しています。(前年比なら90%近い…。)
フランス産 O.H系についても可能な限り確保作業を進めています。
フランス産 O.T系については、これからです。
オランダ産 O.H/O.T系についても仕入作業が開始されました。
皆様にはそろそろ準備を始めてくださいます様、お願い致します。
- 5) 15年産南半球産百合球根につきましては、6軒の取扱い輸出業社からの聞き取り調査を行い(4月6日)5軒からの文章回答、1軒からの聞き取り回答を得た結果、
4月14日 PM22:00 修正が入りました。

	A. H/L. Aetc系	O. H/O. T系	合計
N. Z産	3,540,000 球	17,031,100 球	20,571,100 球
C. H産	690,500 球	6,257,425 球	6,947,925 球
15年産4月6日輸出業社受注球数聞き取り調査より	4,230,500 球	23,288,525 球	27,519,025 球
14年産輸出球数H27年1月末聞き取り実績数	(3,280,975球)	(22,382,225球)	(25,663,200球)

*N.Z産/C.H産、O.H/O.T系の球数を土としている理由は、口頭確認している輸出業社からは各国別分類が間に合っていなかった為です。***確認がとれました。(4月14日 PM22:00 修正)**

A.H/L.A系は、昨年輸入実績より約950,000球増加している様です。これは埼玉雪害からのリハビリと思えばビックリする水準ではないでしょう。14年産オランダ産 L.Aの絶対輸入数は足りていないはず…。

O.H/O.T系は、昨年輸入実績より約900,000球増加となっております。(深谷地区、大手様のN.L→S.Hへの変更の影響が少なくないとの事。)

N.Z/C.Hにおける作況状況、今や最大の南半球産百合球根消費国となっている中国の市場動向を考えれば、欠品が発生する年ではないと考えられる一方、今後品質不良により圃場廃棄も計画されている様です。

N.Z産 O.H/O.T系が前年輸出実績をやや下回る確保数に留まっていることに対し(約400,000球減)C.H産は、約1,300,000球も確保数が増加しています。

良い結果が出ることを切に願います。

以上相変わらず下手くそで、長い文章ですみませんが、出張報告とさせていただきます。

他の3名のレポートも読ませていただきたいものです！

ご不明な点等お問い合わせください。



<http://www.lily-promotion.jp/>
私共はLilyの隆栄に賛同し
協力・応援しています

以上 森山 隆